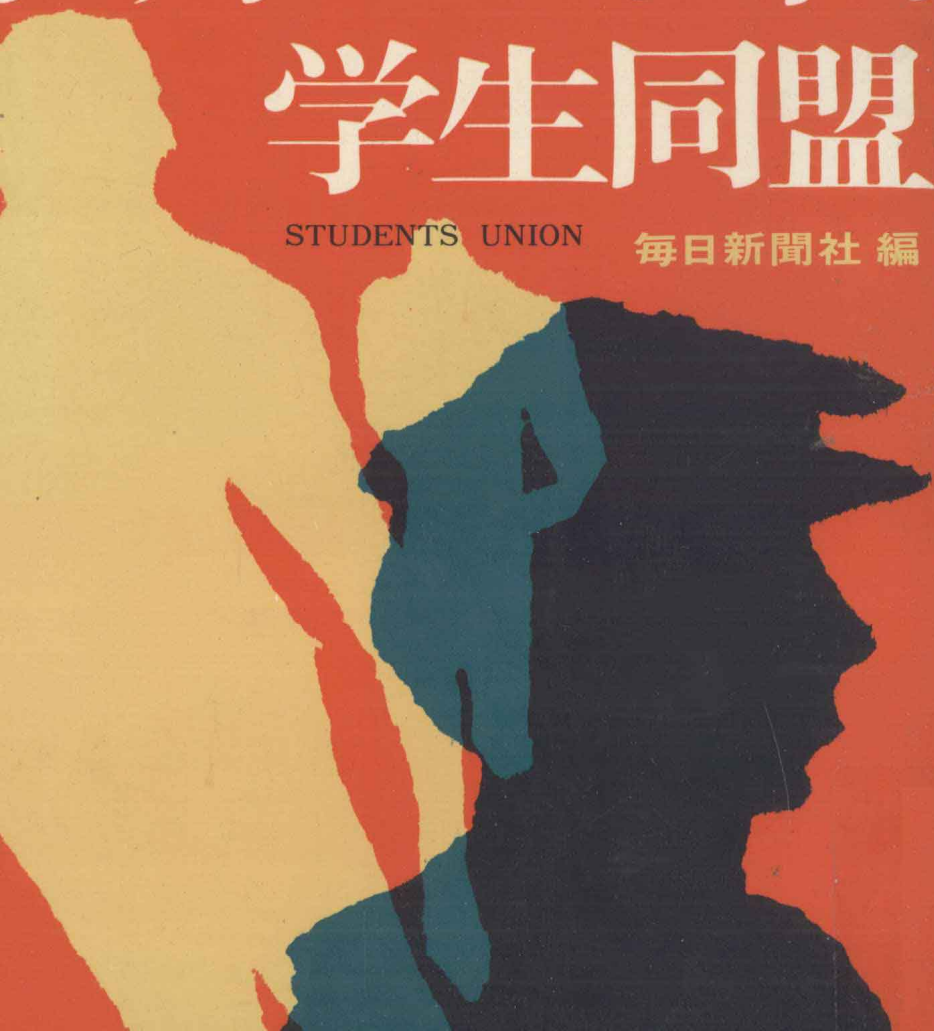


MAINICHI NON-FICTION

在外父兄救出 学生同盟

STUDENTS UNION

毎日新聞社 編



毎日ノンフィクション

在外父兄救出 学生同盟

毎日新聞社 編

在外父兄救出学生同盟

¥ 380

昭和43年1月5日 印刷

昭和43年1月15日 発行

編 者 毎 日 新 聞 社

発行者 星 野 慶 栄

発行所 毎 日 新 聞 社

東京都千代田区竹平町
大阪市北区堂島上
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

印刷 中央精版印刷

製本 田中製本

序

高松宮宣仁

このたび毎日新聞社から、在外父兄救出学生同盟の諸君の敗戦直後の活動を描いた記録が刊行されるに際して、心からおよろこびを申しあげます。

あの敗戦の混乱の中で私たちは、日本再建の努力をつづけるかたわら、一方では海外にあった六百六十二万人におよぶ軍人、一般同胞を、無事祖国に迎えるという未曾有の出来事に直面しました。

この引揚援護の作業は、なにぶんにも、私たちにとって初めての経験であっただけに、困難を極めました。各方面の人たちが種々力を尽しましたが、事の性質上、政府当局の施策がどうしてもきめのこまかさを欠きがちであったことは、事実でありました。

そのとき学生同盟の諸君は、本当に人間としての血潮の通った動機のもとに志を立て、団結のもとに行動し、引揚援護に大きな功績を残されたのであります。

疲労困憊し、やっとの思いで懐しの祖国に帰りついた引揚者を、学生同盟の諸君がDDTの白

い粉をあびながら温く迎えた当時の思い出は、今なお眼の底にはっきりと映し出される光景です。当時、戦災援護会総裁であった私としては、その頃を回想して誠に感慨深いものがあります。

あの困難のまっただ中で、学生同盟の諸君が体得した尊い経験というものは、現代の若い人々のそれとは非常な違いがあります。

昭和四十二年四月、私は二十年ぶりに毎日新聞社で開かれた学生同盟の二十周年記念大会に招かれて、当時の諸君がいまやそれぞれ社会の第一線で活躍しておられる姿に接し、感慨ひとしおのものを覚えました。学生同盟の諸君の体験をつぎの世代に伝えるためにも、本書は意義深いものがあると思います。

私は、学生同盟の諸君の活躍に対して感謝の言葉を惜しまぬとともに、今後とも国家、社会のため、十二分に健闘を続けられることを祈念し、発刊のよろこびの言葉とします。

昭和四十三年一月

目次

序……………高松宮宣仁

海外の同胞を救おう

“学生同盟”の誕生……………二〇

同志糾合……………二六

ヤミ市の街頭演説……………三〇

結成大会……………三六

日劇の免税興行……………三〇

遊説第一陣、九州へ……………三八

高松宮直訴と天皇拝謁

陳情文の作成……………四

高松宮の温い援助	五四
引揚者の惨状	五八
焼野原の皇居で	六三
白旗と赤旗	六九
元老と木曾の御料林	七四
九州大遊説	七八
吹雪の北海道へ	八四

北朝鮮、満州へ潜入

死を覚悟の密航	九四
北朝鮮で一ヵ月	九九
悲惨な脱出行	一〇七
鬼が目をむく三十八度線	一一五
ついに平壤へ	一二〇
窮状に泣く避難民	一二六

金日成に陳情		一三四
保安局長の温情		一四三
涙		一四八
医者に変装して		一五四
コロ島から大連へ		一五六

引揚者を迎えて

連日の駅頭奉仕		一六四
深夜のお産		一六八
あたたかい「おにぎり」		一七四
お人形の思い出		一八〇
愛		一八三
全国組織の奉仕活動		一八七
未熟な医者		一九七
鉄路を血に染めて		二〇四

青春の栄光と苦悩

財産家の学生同盟	二〇
文化部などの活躍	二四
学生会館の獲得	三〇
去って行った友	三六
ゆれ動く学生同盟	三三
ある終末	三九
あとがき	四三
年表	四五

在外父兄救出学生同盟

海外の同胞を救おう

“学生同盟”の誕生

太平洋戦争が終わったとき、アジア諸地域に在留していた日本人は、戦前から長く居留していた一般人や戦争中従軍した軍人、軍属をふくめて六六二万人であった。

これら一般在外父兄のもとをはなれて日本で勉強していた学生たちは、父兄の安否もさることながら、学資送金がとだえ、たちまち生活に困ってしまった。

両親と兄弟を新義州（朝鮮）に残して、東大で学んでいた藤本照男もその一人であった。藤本は終戦と同時に、一時新義州に帰ろうかと思っていた。

しかし、日本がはじめて味わった敗戦は、藤本のそんな暢気な考えを吹きとばしてしまった。新聞が連日のように「新義州の監獄破らる。韓国の犯人、巷に満つ」「ソ連、三十八度線まで南下」と、朝鮮の騒然とした有様を伝えたからだ。現実はその混乱は、想像以上のものがあつた。

藤本はいてもたつてもおられず、早速、外務省を訪れ、新義州の状況などを聞いたが、さっぱりわからなかった。ただ、応接してくれた係員が、

「霞山会館に在外同胞援護会がある。そこなら、何かわかるかもしれない」と教えてくれた。



敗戦の日、皇居前でぬかずく人たち

しかし、ここでも事情は同じであった。ところが、藤本が外地からの学生たちが親もとからの送金
がとだえて困っている窮状を訴え、応接に当たった在外同胞援護会の理事、岩井英一氏（広東総
領事）が、

「同じ境遇の学生たちに呼びかけて団体をつくれば、何とか面倒をみよう」と知恵をさずけてくれた。

大体この岩井氏は、在外同胞援護会をつくるに力のあった人である。広東から外務省に事務連絡にきたまま終戦を迎え、任地にかえれなくなってしまった。東亜同文書院出身の岩井氏が、終戦になったとき真っ先に考えたのは、在外同胞のことだった。

「日本へ帰ってくる在外同胞をどうするのか、誰が世話するのか」

この問題について、ただちに上司に意見具申をした。その意見が具体

化されて、外務省、内務省の人々が中心となって「在外同胞援護会」（社団法人）が虎ノ門の霞山会館の中にでき、広く在外同胞のために通信連絡、消息調査などに活発な活動をするようになったのである。

そんな岩井氏だから、藤本を大いにはげましたのだった。

當時を回顧して、岩井氏は、

「わしは、若いものが大好きでね。しかも敗戦後の日本は、青年たちの手で復興しなければならなかった。いろいろな面倒をみたと思うが、わし一人の力ではないよ」

と語っている。

何もしなければ食うにも困る藤本は、その足で友人の犬塚堯（東大）を訪ね、在外同胞援護会の件を話した。犬塚も乗り気になり、そこで友人の杉山弥太郎（東大）にも仲間になってもらおうと、二人で下北沢の杉山のアパートへ出掛けた。

杉山のアパートで三人は、徹夜して学生の団体の結成について話しあった。

昭和二十年九月二十三日であった。ここで団体の名称を、在外父兄救出学生同盟とすることが決まった。そして他の大学の同じ境遇の学生たちにも呼びかけて、この同盟に参加してもらおうということになった。

翌日、三人はこのことを、在外同胞援護会の岩井理事に報告した。岩井理事は、霞山会館の一室を在外父兄救出学生同盟に提供するとともに、運動資金五千元を出した。



見渡す限り焦土と化した敗戦直後の東京

藤本は、このようにして生まれた在外父兄救出学生同盟の発端の模様を、当時の機関紙「同盟時報」に、次のようにしるしている。

「大きな歴史の潮流が、私の故郷である大陸を吸い取ってしまった。二十世紀に唯一つの迷宮があるとすれば、それは諒闇に包まれた大陸の姿である。」

報道は一齐に私達の年老いし父母の祈りと、いとけなき弟妹の号泣を伝えて来た。剩さえ私達は、海外からの送金が杜絶え、今晚の食にも事欠くという現状であった。風起ちぬ、いざ生きめやも。宿劫の扉を今こそ私達の熱願で打開かねばならぬ。

九月も末であった。秋の虫が生命を鳴き尽す夜半、在外に父兄を持つ三人の学生が下北沢のアパートに集まったのである。破

れた窓からは、季節はずれの冷たく鋭い北風が吹いて来た。

私達は、ただ黙って紫煙を燻らせていた。

癡女饑咬我 啼畏虎狼聞 懷中掩其口

反側声愈嘖 小兒強解事 故索苦李餐……

(癡女饑えて我を咬む、啼いて畏る虎狼の聞ゆるを。中に懷きて其の口を掩う、反側して声愈々嘖る。小兒強いて事を解す、故に苦李を索めて餐う)

杜甫が賊を避けた夜深い彭衙の道行きが、脱走する母や弟妹の姿に溶け込んで行った。

胸奥に何かしら冷たく遅しく、憤ろしい英雄の情感が流れて行く……。

在外父兄救出学生同盟という名称が、期せずして生まれ出たのであった。これだ。吹き荒ぶ共感の折りから生まれた私達のモチーフの唯一つの表現は。

果しなき憤怒と、逞しい意欲との驍進であった。しかし学校を回る足は、次第に重くなっている。道行く学生には手当り次第『在外に父兄を持つ子弟を知っていたら霞山会館に来るように』と歎願した。

一日、二日、木の根っこに兎が転ぶのを待つように、空しく、ただ空しく待っていた。三日目、下駄を履いた慶応の学生(註『荒川亮』が、『学生同盟はどこですか』)といって胡散臭く部屋を見回したのである。獲物に飛びついたという方が、寧ろ表現として遙かに妥当だ。彼こそ第一番目の同志であらしめたいからなのだ。それと同時に何一つない、客を遇する椅子さえもない同